



～ 第 23 回パッションフルーツ品評会の審査講評 ～

今年の小笠原のパッションフルーツ栽培は、栽培期間中の平均気温が例年より高く推移したことや湯水の影響で、収穫の盛期が想定よりも早まったことにより、栽培管理や出荷作業に大変ご苦労されたことと存じます。しかし、例年と同様に、高品質な果実が収穫されており、ひとえに生産者の皆様のきめ細かな栽培管理とこれまで培われた経験や技術の賜物であると感じています。

今年度の品評会は、5月30日に農産物観光直売所会議室において開催され、農協、小笠原村、小笠原支庁産業課、亜熱帯農業センター及び母島営農研修所の各職員、計7名が審査員を務めました。出品数は全11点で、父島からの出品物が1点、母島からの出品物が10点でした。審査項目は、果実の形状や光沢、熟度、品質の揃い、傷の有無や消費者ニーズ等の商品性とし、これらを総合的に評価しました。

今回の品評会は、収穫盛期を過ぎた時期の開催となりましたが、いずれの出品物も栽培技術の高さが感じられ、レベルの高い難しい審査となりました。その中でも、金賞を受賞した出品物は、着色の揃いが申し分なく、特

に光沢は他の出品物と比較しても傑出していました。銀賞や銅賞を受賞した出品物も素晴らしい逸品でしたが、形状や光沢の僅かな不揃いが見られたことが金賞との差になりました。その他の出品物も素晴らしい良品でしたが、熟度に不揃いがみられる出品物もありましたので、次回の出品ではご配慮いただくと幸いです。

小笠原のパッションフルーツは、日本一といってもいいほど外観、食味ともに優れており、島内外を問わず、小笠原を代表する特産品として好評を博しています。こうした唯一無二の品質を誇るパッションフルーツを生産する高い技術力を有し、丁寧な栽培管理を行っている生産者に敬意を表するとともに、今後益々のブランド価値向上を期待しています。

〈所長：中越〉



写真 金賞（松本農園）の出品物

| | | | | | |
|----|---------|----|----|----|----|
| 金賞 | 小笠原村長賞 | 母島 | 松 | 本 | 農園 |
| 銀賞 | 小笠原支庁長賞 | 母島 | 上 | 川 | 農園 |
| 銅賞 | 農協組合長賞 | 母島 | 小松 | 武人 | 農園 |

～農業センターのムニンツツジについて～

農業センターのムニンツツジに関するこれまでの取組をご紹介します。

ムニンツツジは、小笠原諸島父島のみ^に自生している固有植物で絶滅危惧IA類に指定されています。小笠原返還直後には躑躅山^{つづじ}に数株の自生株が確認されていましたが、1980年の大干ばつ、1983年の台風などの自然災害や環境の変化により、1株を残すのみになりました。増殖、現地還元等の試みは、東京大学大学院理学系研究科附属植物園（小石川植物園）で行われ、1987年からかつての自生地周辺に植栽されました。

農業センターでは、都の事業として1998年頃からムニンツツジの保護増殖対策に着手しました。植栽株や小石川植物園の育成株を基に試験を行い、2004年に「ムニンツツジの増殖・植栽方法の開発」として、実生や挿し木による増殖方法等を報告しています。現在、農業センターの展示エリアで、生垣状に密生している姿を見ることができます。



ムニンツツジ（ツツジ科）

高さ2～3mになる常緑低木で淡褐色の長い剛毛を有します。枝先に漏斗形で5つの花弁の白い花が咲きます。農業センターでは春に限らず良く花をつけます。

●農業センターのムニンツツジ



●農業センターが明らかにした研究成果

- 1 種子は20℃条件下で良好に発芽する。11～12月に取り播きをすることが望ましい。水苔や赤色土で発芽は優れるが、セルトレイを使う場合は水苔だと扱い易い。
- 2 充実した挿し穂があれば、挿し木増殖が可能であるが、フォグ装置等が必要と考えられる。発根促進剤を使うと発根率が高まる。
- 3 自生地の土壌pHは6.1～6.3であった。育苗土のpHが6.6以上では樹高の伸びが停滞する。
- 4 植栽後の土壌水分は、手で触るとかなり湿っていると感じる、pF1.8程度を保つことで高温期の生存率が向上する。
- 5 植栽時に遮光（遮光率60%）＋マルチを用いると高温期の生存率が向上する。
- 6 条件が整えば播種から4年ほどで開花し、種子採取も可能である。

＜自生種担当：蜷木＞

＜参考文献＞

2004, 松本ら：ムニンツツジの増殖・植栽方法の開発。東京農試研究報32, 79-92
2014, 豊田：小笠原諸島固有植物ガイド。ウッズプレス Inc., 250-252

～粘着板を用いた害虫防除について紹介します～

粘着板は、特定の色に引き寄せられる虫の性質を使って、害虫を捕獲します。発生モニターリングや大量捕獲による防除などの用途があります。害虫の特徴を知り、粘着板を上手に使うことで捕獲効果を高められます。

●害虫の飛んでいる範囲を知ろう

作物の近くでは、対象とする害虫の通る所に粘着板を設置すると効果的です（図1）。

- ・アザミウマ：地表から1m程度の高さでの移動が多い。土中でサナギになり、羽化すると植物体へ移動する。
- ・コナジラミ：成長点付近を好む。
- ・アブラムシ：地面からあまり高くないところを飛ぶ。地面すれすれに飛ぶ種類もいる。
- ・ハモグリバエ：50cm程度の低い位置で飛ぶ。土中でサナギになり羽化する。

●害虫の侵入経路を知ろう

施設栽培の場合、①の場所に加えて側窓や出入口などの開放部から多くの害虫が侵入します。防虫ネットを展張していても、ネットの目合いより小さな虫が侵入したり、穴やゆるんだところからの侵入があり、完全に防ぐことは困難です。圃場内で例年発生が始まる場所を把握しておくが良いです。

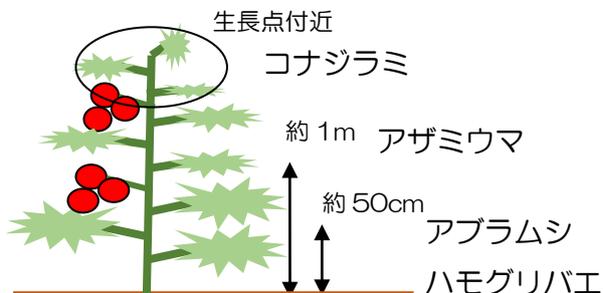


図1：各害虫の飛来しやすい高さ

●粘着板の活用のポイント

商品に記載の使用方法を確認し、①、②を参考に害虫の寄生が始まる場所の付近に粘着板を設置します。粘着板の最大誘引距離は1～2m前後で、メーカーでは1mおきに設置するとより効果的としています。虫によって色を使い分けると観察しやすい場合があります。

モニターリングでは：なるべくこまめに粘着板を確認し、害虫の発生を早期に察知して防除の開始を決めましょう。

大量捕殺では：虫や土ぼこり等の付着が多くなると粘着力が低下するので、そのような時は交換しましょう。

～害虫の好む色～

● 黄色：コナジラミ類、アブラムシ類、ハモグリバエ類、アザミウマ類等

● 青色：ヒラズハナアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ等

<病害虫担当：佐々木>

粘着板のベタベタが苦手な人は…
手や葉っぱに付着しにくい形状の商品もあります（ネット付、はく離紙付等）。
ハンドクリーム等の油分で
ベタベタは取れやすくなります。



講習会開催のお知らせ

養鶏、養蜂についての畜産講習会を開催します。母島では9月3日に農協2階で、父島では9月5日に東町観光直売所2階で、いずれも17時から開催します。ぜひご参加ください。

～ミニトマトの有望品種の特性把握～

小笠原では、糖度が高く食味が優れる「甘っこ」の栽培が行われていますが、果実が割れる「裂果」が生じてしまいます。また、需要に対し供給量が足りていないため、更なる収量の向上が求められています。そこで、より優れた品質を持ち、収量の増加が見込める品種を求め、「甘っこ」を含む3品種について、栽培特性を明らかにしました。

「ロッソナポリタン」、「ぶちぶよ」の2品種を調査したところ、「甘っこ」と比較して総収量はどちらの品種も低かったのですが、「ロッソナポリタン」については可販果率が高く、裂果率が低い傾向が見られました。また、「甘っこ」の糖度は他品種より有意に高いという結果が得られました。

営農研修所では、引き続き小笠原での栽培に適した有望な品種を探していきます。

＜トマト担当(母島)：直井＞

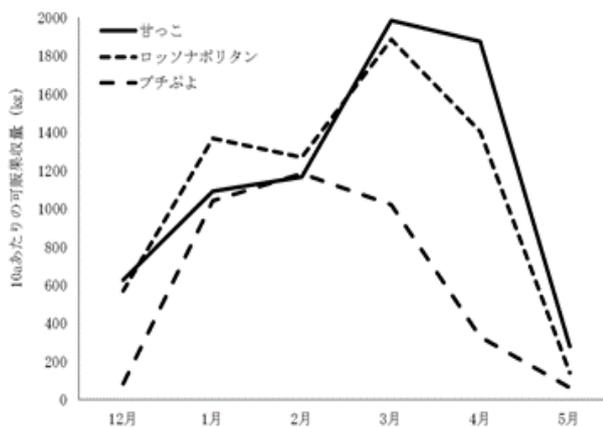


図1 各品種における10aあたりの月別可販果収量

消費者に対する食味アンケート調査の結果

(一部抜粋)

- 「甘っこ」は見た目も良好で、糖度が高く、食味が良かった
- 「ロッソナポリタン」は甘みは強くないが、トマトらしい味が強く、後味が良い。
- 「ぶちぶよ」は甘味、酸味がそれほどなく、インパクトが弱い。独特な食感は癖になる。

～ 土壌診断の傾向と対策(2024①) ～

今年度1回目の土壌診断を実施しました。診断数は、母島11戸35件、父島2戸13件でした。個別の改良対策は農協からお知らせしましたが、今回は目立ちました低pH・高pHについてお知らせします。pHが偏り過ぎると、土壌中の栄養成分の溶解性や可給性が変わり、栄養過剰や欠乏が発生することがありますので、管理を修正しましょう。

●低pH

肥料の副成分の蓄積、アルカリ成分の植物による吸収や灌水による流亡等で低pH化を招きます。アルカリ成分不足の場合は、次作前に石灰資材を施用することで改善が可能です。施用しすぎは高pH化を招くので、

診断結果を基に石灰量を計算しましょう。石灰資材は有害ガスを出すことがあるので、植付の1か月前に施用し、施肥と同時にしないようにします。また、未熟有機物を大量投入すると、窒素飢餓が起こるだけでなく、二酸化炭素や有機酸が大量に放出され、土壌pHが低下することがあるので注意します。

●高pH

主に石灰資材の施用しすぎが原因です。一般的には作物が吸収するのを待つしかありませんので、石灰資材の施用を控え、毎年の土壌診断を受け、徐々に減らしましょう。

●第2回は7月中旬、第3回は11月末です。

＜普及指導担当：北山＞